



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY



CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter



関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

June 2011

vol. 06



46年前の“SCIENCE”

教育開発支援センター 副センター長
教育推進部 教授 三浦 真琴

「教師は一体何のためにいるのですか」。今から2年前、教育GP審査員の一人から受けた質問である。LA (Learning Assistant) についての説明を求められた際に、PBL型の授業科目においてラーニングモデル・ファシリテーター・メッセージャーとして活動するのがその主たる役割であると応じたところ、それでは教師がすべきことがないではないかと問われた。幸い、この応答は大過なく済み、申請したGPは採択されることになったが、同様の問いかけを何処かで見た覚えがあるなど、しばらく頭から離れなかった。

科学史に関心があるので、かつては“SCIENCE”や“NATURE”の記事や論文を拾い読みしていた。もしかかと探してみると、それは1965年のSCIENCEにあった (“What are Professors For?”, 18 June 1965, Vol. 148, No. 3677, p.1545)。大学の講義に映像装置や最新機器が導入され、教育の方法や形態に新しい変化が見られようになった頃である。その技術に依存して、あるいは操作や活用に精通・熟練することに心や時間を奪われて、学生との人間的接触が稀薄になるとの懸念がそこには表明されている。発行年や巻・号数をすっかり失念してしまったが、LL教育についても同趣のエッセイが寄せられていたと記憶している。

いったい、いつの世でも新しい試みには批判がつきものである。なるほどそこには未経験ゆえの難題に遭遇する危険あるこ

とはこれを否定できないが、新しい可能性より既に成果が分かっている旧套に軍配を上げる積極的理由は見出しがたい。新機軸が開発され、導入されるにはそれ相応の背景や経緯がある。それを等閑視し、あるいはすぐさまに効果を断じるのは賢明ではない。とはいえ、それは積年の課題を瞬時にして万端克服するものではないから、そこに安易な万能感を期待するのは厳に慎むべきである。殊に教育の世界においては、新機軸が導入されたとして、人間である教師なればこそその役割を見失ってはならない。先述のエッセイの要諦はそこにある。

しかしながら、かかる批判が常であったアメリカの高等教育界では、次々に新機軸が採用されるばかりか、「教師の使命」観が変わりつつある。久しく人気のあった“promotion”より“facilitation”が役割と捉えられ、IBLやPBLが積極的に導入されている。そこに見られるのは「教師中心主義」から「学生中心主義」へのパラダイムシフトであるが、それ以上に「知の転移」という営みからの脱皮であるように感じられる。当然のことながら「教師のすべきこと」は変容し、以前にもまして、そして以前とは異なる創意工夫が求められるようになってきた。とはいっても、模索しながらもそれに取り組もうとする教師の姿こそが学生の知への刺激になるのは、古今東西の別を問わないはずである。このことだけでも肝に銘じておきたい。